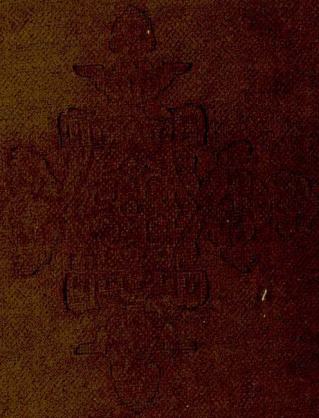


日本語の世界 1



日本語の成立

大野
晋

日本語の世界
1

中央公論社



日本語の世界 1

日本語の成立

定価一八〇〇円

昭和五十五年九月二十五日初版
昭和五十五年十一月十日六版

著者 大野 晋

発行者 高 梨 茂

印刷者 山 元 悟

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二丁目一七

振替東京二二三四

©一九八〇 検印廃止

日本語の成立
目次

序章

日本語の力 『ファウスト』の韻律 万葉仮名の研究へ 人間と共にある言語の歴史 日本語の多層構造 日本語の成立

第一部 文字の無かった時代

第一章 神話の時代 (1)

日本の高い識字率 沖繩の結繩法 神代文字 無文字社会の伝承 祭儀と神話 コトの意味 国生みの神話 神話の言語とその内容 民話と神話 ニューギニアの食糧起源神話 ハイスエレ神話 瓜子姫の民話 瓜子姫民話の型式 ハイスエレ神話と瓜子姫民話 破壊された土偶 神話の変貌 食用栽培植物の歴史 ヤマトノヲロチ 「八」という聖数 古代日本の兄弟姉妹の呼称 ポリネシヤの血族組織 プナルア婚 イモ・セの新しい意味

第二章 神話の時代 (2)

イザナキとイザナミ デメーテル神話 オルベウスとエウリディケ 話の共通性 スキタイ人の役割 アルタイ族の神話 アマノカグヤマ 大地を取り巻く山々 世界の三層構造 古朝鮮の建国神話 ニニギ神話と瓜子姫神話

第三章 日本語の重層的成立

神話と食糧生産の対応 日本語の特質 パプアの言語 チベット語と日本語

タミール語の特徴 音韻の対応 言語の親族関係 日本語とタミール語の音韻対応 雑穀栽培の単語 タミール語との相違 言語と食糧起源神話の相応 照葉樹林文化と言語 原日本語と原タミール語との関係 アルタイ語と日本語 蒙古語と日本語 古代の北朝鮮 古代の南朝鮮 高句麗語と日本語 高句麗語の数詞 高句麗語との類似 「倭人伝」の日本語 朝鮮語と日本語 朝鮮語との音韻の対応 対応の内容 文法的単位の対応 造語法上の共通点

第四章 語彙の発達

サケという単語 中国語のアル、英語のアル 日本語のアル タテという言葉 漢字のタテ、英語のタテ タテの二つの概念 タダシイという概念 タダシイの由来 シタとシモという観念 いま一つのシ 意味変化に見る民族の思考 日本語の語根

第五章 音韻の変遷

ヒフヘホの音 仮名として使われた漢字の音 万葉仮名の研究 最古の時代の音韻組織 文節の中の音節 母音調和 新しい母音の発達 新しい母音の実態 多い母音と少ない母音 八世紀の母音体系の成立と崩壊 平安時代以後の音韻 音韻体系の年代と文献の成立年代

第六章 日本の東と西

東部日本と西部日本との対立 女性の定住率 出土品に見る東西の対立 血液型・指紋の東西対立 B型肝炎の抗原基の分布 「沢」と「谷」の分布 血

大表における東西日本 縄文時代の東日本の優位 弥生時代の西日本の優勢
第一の東国 第二の東国 第三の東国 東国方言の特徴 助詞のガ

第二部 漢字で日本語を写した時代

第七章 婦化人が漢字を教える

文字の獲得 文字と文化 文字の渡来と婦化人 婦化人の役割 婦化人渡
来の時期と性格 第一の婦化人 稲荷山古墳出土の鉄劍銘 古い婦化人の学
問 第二の婦化人 漢字の別の用法 第三の婦化人

183

第八章 文章を制作しはじめる

漢文の日本語化 古事記の文章 記紀以前の文献の誤読(一) 記紀以前の文献
の誤読(二) 古事記と日本書紀の比較 神に宛てた漢字 「天照大神系」と「日
神系」 天孫降臨神話の比較 古事記は総合版 古事記偽書説の誤り オ
列音甲類乙類の区別の意味 古事記以後に区別した発音 日本書紀の成立
『藝文類聚』の利用 婦化漢人の役割 日本書紀訓読の努力

204

第九章 ウタを記録する

ウタフとはどんなことか 日本語のウタの由来 掛け合いとしてのウタ ウ
タと呪言 「言葉のさきはふ国」 イミ言葉と言語変化 集団で歌うウタ
ウタは朗吟するもの 無文字社会の表現技巧 枕詞のいろいろ 長く遅かつ
た発音 連想による意味の転換 たたえ言と枕詞 文字社会での枕詞の衰亡
漢詩漢文とウタの発想 変字法 万葉集の変字法 中国の詩法と変字法

235

五七調の成立 歌の表記にひかれた五七調

第十章 文法について自覚を持つ

日本語の特色 助詞・助動詞を小字で モ・ノ・ハ・テ・ニ・ヲを闕く歌
否定表現の拡大 動詞の否定 動詞アリの紹介

第十一章 漢詩を作り漢文を訓読する

大伴氏と歌 藤原氏と漢詩 漢詩と官人 漢詩の規定 押韻と平仄 漢
詩の真の理解と制作 漢字を飼い馴らす 推古遺文の万葉仮名 万葉仮名の
手紙 片仮名の発達 漢文訓読の工夫 日本書紀の養老の訓読 仏典の訓
読

第三部 仮名を作って日本語を書いた時代

第十二章 女手の世界

平安初期の漢文の流行 女のための文字・女手 有年の仮名文書 草と女手
手習詞 漢字文化圏の崩壊 和歌の伝流 歌合せの流行 『古今集』と女
手 『土左日記』 『竹取物語』 『かげろふ日記』 『源氏物語』 散文文学
としての『源氏物語』 女手と諺文

第十三章 漢字を使い馴らす

漢字の日本の使用 訓読体による文章 漢和字書の編集 『篆隸万象名義』

『新撰字鏡』 『倭名類聚抄』 『類聚名義抄』 『色葉字類抄』

第十四章 定家仮名遣

あらえびすの言葉 引き歌の技法 藤原定家の成長 伊呂波歌の役割
い・ぬ、え・ゑ、お・をの区別 『色葉字類抄』の役割 アクセントの高低
定家仮名遣の原則 定家の『僻案』 藤原定家の声望と仮名遣 仮名文字遣
の成立 日本語の発展 正書法の確立と言語の自立

補 注 341

参考文献 353

あとがき 354

索引 366

日本語の成立

序章

日本語の力

日本語は果してヨーロッパの言語のように、厳密で精確な表現の可能な言語なのだろうか。旧制の高等学校に入学して、自由に考え、読むことができるようになったとき、私の心の底でめぐっていた思いの一つは、それであった。眼前にそびえるヨーロッパの学藝の壮麗さのただ中に飛び込む友人たちの中に居て、私は明らかに知りたかった。日本はヨーロッパの持つ何を欠くが故に、ヨーロッパをこのように追いかけていかなければならないのか。日本がヨーロッパに及ばないのは何故なのか。ことによるとそれは、日本語という言語がヨーロッパのような思考と表現の厳密さや精確さにたえない言語だからではないか。

日本語のたしかさを求めて、私はある時は大祓の祝詞のりとを声高く朗誦した。私はそこに日本語の力強さの泉があふれ出ているのを感じた。大伴家持の春の歌を読んで、繊細で優しい日本語の表現の伝統を思った。またある時は、柿本人麿の挽歌の数々を読み、長歌としてたたみ上げて行

く言葉の雄渾と犀利とに感動した。仮名文学に読み耽っては、『源氏物語』の言葉遣いの、かすかな薄衣をまとった、つくろいの裏に、正確に書き込まれている女性の悲しみをひしひしと感じた。この精緻な、やまとことばの散文がもしなかったら、どんなに日本語はさびしい貧しいものになっていただろう。私はまた、世阿弥の藝論を読んで、藝術一般に通じる「心」と「わざ」との至り深いかかわりを教える、滋味ある文章をそこに見た。

『ファウスト』の韻律

しかし。義務として教室に坐って聞いていただけだったゲーテの『ファウスト』であったが、試験の前夜になって、やむを得ず森鷗外の翻訳に頼って読み始めると、読み進むに従ってその原文は波濤のように私の胸に押し寄せて来た。その韻律の圧倒的なうねりは私の心をゆすってやまなかった。ほのぼの夜の明ける頃、鷗外の訳はまるで瓦礫のように見えた。柿本人麿のあの高市皇子を傷む長歌の緊張と迫力さえも、この『ファウスト』の前には物の数ではなかった。私は長い息をついた。明治時代以来、何人もの詩人が、日本語に絶望して詩を離れ、詩を棄てたのを、その時によく理解できた。日本語の音節の構造、その配列、文法上の語順の規則——それらはドイツ語の韻文に見られる美しい技巧、力強いリズムと脚韻の旋律とをばんでいる。日本の詩歌が日本語の性格によって本質的に負っている技術上の制約を、私はくち惜しく反芻した。

万葉仮名の研究へ

私は、日本人は論理的な表現に弱いと聞いていた。あるいは抽象的な思考力に欠けていると聞いた。それは本当なのだろうか。日本人は仏教を受け入れ

ながら、それをどのように消化したのか。鎌倉時代になって親鸞や日蓮が出て来て、日本語で民衆に新しい日本仏教を語ったが、その言語は以前に仏教の教説で使われていた日本語と何処か本質的に違っていたのだろうか。漢字を学び、漢文を読み習ったことによって、日本人の思考力は本当に養われたのか。それらが私の絶えない疑問だった。

結局私は「日本とは何なのか」を知りたさに古代の日本人の精神と生活とを見ようとした。そのため万葉集を読まなければいけないと思ひ、それを本式に研究するつもりで大学に進んだ。ところが万葉集の正確な理解には万葉仮名の知識が必要であった。そこで私は卒業論文に万葉仮名の研究を選んだ。万葉仮名の研究は音韻体系の研究と直結する問題である。古代の音韻体系に関する知識は、そのまま日本語の系統の研究へと進み入る基本的知識であった。日本語の系統を明らかにすることは、日本人の生活と精神の歴史を明るみに持ち来すための一つの手順である。私は自然の成行きでそれに取り組んだ。

人間と共にある言語の歴史

旧版『日本語の起源』はその探索の一つの結果だったが、極めて不十分な研究にすぎなかった。しかし、それは手法において従来の日本語系統論とは趣を異にしていた。日本語の系統、あるいは日本語の成立の問題は、たしかに言語学上の問題である。言語学の問題を他の関係学——考古学、文化人類学、形質人類学などによって置き換えてはならぬ。それは理の当然である。しかしその頃までの日本語の系統論の視野は、あまりにも言語学だけの世界に閉ざされているように見えた。しかもいわゆる言語学的方法によ

る明治時代以来の研究、もっぱらアルタイ語を指向する系統論は、まだ十分な答えを得ていなかった。探求の仕方に、あるいは探求すべき地域の着眼に、何かの見落しか誤りがあるのではないか。それを見直すためには、多くの関係学に目を配り、知りうる最大の情報を集める必要がある。そこから、何らかの指針を得ることができはしまいか。それが私の「日本語の黎明」「日本語の起源」で採った方法——民族学、考古学、形質人類学などの成果を考慮に加える行き方だった。

私はそれまでの日本語の歴史の取扱いに大きな不足を感じていた。言語学によって言語の問題を決するという根本は正しいとしても、言語それ自身は、音韻、文法、語彙、文字などによってだけ存在しているものではない。言語は人間相互の交渉の具であると共に、言語作品は一つの文化の中において成るのであり、また文化それ自身である。言語は他の宗教、信仰、政治、生産技術の如何によって変えられもし、また圧力を加えられて、亡ぼされもする。そのことを全く顧みずに、盲目的に音韻とか、文法とかだけを切り離して考察しても、それは言語の真実をとらえない。首都の移転によって標準語は移動し、古い標準語がそのまま方言の位置に転落することもある。経済的に繁栄を極める所からは新語が生まれて拡散することが多い。政治、文化の中心地の言語は強力であり、僻地の人々はそれを模倣する。教育のとどいた地域では言語は保守的であり、経済・文化の力の弱い僻地では、言語形式の単純化が生じやすい。そしてその単純化された形式が逆に、文化の中心地に伝染して行き、言語変化の方向づけをすることもある。

これら政治的、経済的、文化的な力関係を見ずに、音韻や文法上のある事柄がA形式からB形

式へ、さらにC形式へと変遷したとか、B形式の出現は、この作品の方が五年早い、十年遅いなどと調べ、記述したとしても、それは歴史とは言えないだろう。そこには言語変化を作り出し、動かして行く本当の人間の意欲や願望についての考慮、言語の歴史の力学の認識が欠けている。私は言語が人間と共にあるものだとということ、つまり言語は生きものである人間が、欲望や祈願や恐怖や絶望と共に発する行為の一形式であること、文化それ自体であることを主張したいと考えていた。

日本語の多層構造

その後私は万葉集や日本書紀の一字一語に執する訓詁注釈に十年あまり没頭した。そしてまた、『源氏物語』を中心とする平安時代の語句の理解に努め、結局、約二十年の時を費した一つの「古語辞典」にそれを集約した。これらは皆、「日本語の起源」につぐ「日本語の歴史」を把握するための基礎の仕事だった。私にとって「日本語とは何であるか」という問いは、一つには日本語の歴史の記述という形をとって答えられるべきものと思われたのである。

ヨーロッパの諸言語は、豊富な資料によって比較研究を行いうる。それに反して日本語は比較すべき古代資料を持つ近隣の言語に欠ける。それゆえ、日本語の系統は現在のところ未だ断定できないとするのが常識である。しかし私は、日本列島に根をおろした言語の層を、系統論に考慮を払いながら見分けようと努めた。

文献時代の最古の状況にまでさかのぼり、それを基礎にして文献以前の日本語について推定を

試み、文字の無かつた時代の日本語の第一の層、第二の層、そしてその上にかぶさつて来た最新の第三の層の言語という少なくとも三つの層の区別をすべきだという考えに私は達した。この考えによれば、文字以前の日本語の歴史がこれまでに較べてかなり明確に把握される。

日本語の成立

私は神話学、考古学、形質人類学、文化人類学その他の学問に広く資料を求めた。そして栽培植物の変遷、及び支配層による国家権力の確立とともに日本語の様相も顕著に変貌したのではあるまいかと考えるようになった。その推論はインドのタミール語と日本語との関係の証明と相俟って、确实さを加えたように思う。私はここにその推定の経過を語ってみたいと考えている。

つまり古代の生活では、どんな食糧をいかにして得るかということが極めて重要な課題である。従つて食糧に関してその始源を語る神話が随伴するのが常である。今日の神話学及び文化人類学に資料を求めて、私は稲作以前の植物栽培と神話と言語との関係を推測し、それが、以後の日本語の根本的性格を規定したことを明確にしたい。

私はヤムイモ栽培に伴う神話が、日本ではどんな形で今日分布しているかについての研究を取り入れ、第二に來たと思われるヒエ・アワ栽培との関係を推測する。そして稲作を持った縄文後期の言語がタミール語と確実な関係にあることを示そうと思う。次には朝鮮半島を通じて來た第三の言語と文化とがその上にかぶさり、それが国家を形成する力を持っていたのだということを述べようと思う。そこまで来れば第四には、漢字の傳來である。漢字のよみ方（発音）を日本に

もたらした漢人、または朝鮮の人々、つまり帰化人が、また三つの波となって日本に到着したことを明らかにしよう。

こうした、文献以前の展開の後に、日本人が漢字で言語を記し、また漢字を使いこなした状況が明らかにされる。さらには仮名を作って自分自身の日常の生活を、ことこまかに書くことが可能になり、やがて、やまとことばによる最高の散文が書かれるに至った事情が明確になろう。そして、平安時代の終り、鎌倉時代のはじめに至って、一人の歌人・評論家・学者を兼ねる藤原定家という人物が、仮名を厳密に正確に使用することによって、言語を明確に表記するという試みを行う。それは信頼を得て人々の間に広まる。これが仮名遣の起源である。ここに至ってやまとことばを正しく書き正しく読むという技術が、日本語の中にはじめて定着する。漢字をはじめて学んで以来およそ九百年にして、日本語はそこに到達した。私は日本語が厳密で精確で美しい表現の可能な言語であるようにと心から望んでいるが、そうした願いの一つが、鎌倉時代のはじめに藤原定家によって具体化された。そこまでを、私はこの書物で取扱うつもりである。このような段階に至ってはじめて日本人による真に自覚的な日本語使用が成立したと私は考えている。